

JOHN HAWKES

ジョン・ホークス作品集【2】

罌 ライム・トゥイック

田中啓史◆訳



THE LIME TWI

ジョン・ホークス作品集【2】

畏 ライム・トゥイック

田中啓史 ◆ 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

彩流社

《訳者紹介》

田中啓史（たなか けいし）

1943年生まれ。

現在 青山学院大学文学部教授。

著書 『ミステリアス・サリンジャー 隠されたものがたり』（南雲堂）

『文学アメリカ資本主義』（共著、南雲堂）

『文学とアメリカ』（共著、南雲堂）

訳書 ウォーレン・フレンチ『サリンジャー研究』（荒地出版社）

フィリップ・H・プフィジス『ノーマン・メイラー研究』（荒地出版社）など。

ジョン・ホークス作品集2

罨 ライム・トゥイック

1997年3月15日初版第1刷発行

著者 ジョン・ホークス

訳者 田中啓史

発行者 竹内淳夫

発行所 株式会社彩流社

東京都千代田区富士見 2-2-2 郵便番号102

電話03-3234-5931 ファクシミリ03-3234-5932

組版 有限会社ポイントナイン

印刷 株式会社平河工業社

製本 有限会社青木製本

ISBN 4-88202-439-X 落丁本・乱丁本はお取替いたします

マクリン・ゲラードに

畏

ライム・トゥイック／目次

シドニー・スライター情報
昨夜ドリアリー・ステーション被害甚大……

9

1
シドニー・スライター情報
ゴールデン・ボウル賞を楽しもうと
オールディントンに観衆続々……

37

2
シドニー・スライター情報
ロック・キャッスル、
記者は依然として疑問符を……

71

3
シドニー・スライター情報
キャンディ・ストライプ好調……
ロック・キャッスルの馬主ノーコメント……

91

4
シドニー・スライター情報
ゴールデン賞、ロック・キャッスルに
引退騎手が騎乗……

111

5

シドニー・スライター情報

ロック・キャッスルの調教師、
ギャングらしい最期……

125

6

シドニー・スライター情報

ロック・キャッスルはかつての優勝馬……
謎の馬はデンマーク王家ゆかりの血統……

141

7

シドニー・スライター情報

ゴールドデン・ボウル賞の発走を
いまやおそしと待つ競馬界……

159

8

シドニー・スライター情報

異常事件のため大レース中止……
最終レース、大観衆の目前で激突のアクシデント……

185

9

197

ジョン・ホークスを読むよろこび

レスリー・フィードラー

201

その一節で私は目覚めた

ウィリアム・H・ギャス

213

訳者あとがき

227

畏

ライム・トゥイッゲ

シドニー・スライター情報

昨夜ドリアリー・ステーション被害甚大……

爆撃機、洗濯屋の中庭に墜落……

ヴァイオレット^{レーン}小路延焼中……

昨夜ブラッド・エンド地区は平穏でしたが、ハイランド・グリーン地区ではいくらか空襲がありました。

いっぽう、ドリアリー・ステーションはドイツ爆撃機により甚大な被害をこうむりました。そこで、シドニー・スライターから一言。うららかな午後の陽差し、すばらしい観衆、うまいビター〔ホップのきいたにがみビール〕の味、石像の英雄たちに晴ればれとした顔が戻り——ああ、やがてはいたるところに娯楽が満ちあふれ、われらに楽しき日々が訪れるであります。そのときには諸君は口笛でも吹いて、爆撃跡の穴を灰皿がわり、うら若きご婦人とレースに出かけて華麗なるひと勝負。とまあ、こんな話をするのも、昨夜この私をシドニー・スライターと知って声をかけてきた者があるからなのです。その男は担架で運ばれた老人で、テンプル・プレース通りの待避壕で休んでいました。私がヘルメットの^{ひまし}底を上げて一服すすめると、突然こういいます、「シドニーよう、おめえまた競馬の記事を書くんだぞ！　前みてえにちゃんと馬のこと書くんだぞ……」。さあ諸君、私の記事にご注目、このシドニー・スライターも諸君のことを忘れず、鋭意努力する所存ですから……

冬のあいだ部屋を貸してたことあるかい。ベッドが空いててさ、角部屋を借りてくれる紳士を心待ちにしたりしたかな。そして、窓にボール紙の札をぶら下げてさ、どんな人が足をとめてその札の手書きの文字を読んでもくれるだろう、建物の屋根のてっぺんからその札まで、ちっぽけで不器用な手作りのその看板まで見てくれるだろう、そして足早に近づいて家のベルを押したりするのはどんな人だろうって、姿を見られないようにこっそり見張ってたことはないかい。ベルが鳴るのをほうっておいで、またもう一晚、むぎむぎベッドを空いたままにしておいたのは、どんな人が窓から見たからなのかなあ。目つきになにか問題が？　ダービーハットのつばと目の間の白くてなめらかな肌が気になったのかい？

それとも、逆にこっちが孤独な間借り人だったのかな。夜の人ごみに混じって橋を渡り、川舟の汽笛や向こう岸の商店が閉まる音を聞いたりしてたよね。月が大聖堂にかかってたりして。その大聖堂の影を踏んで歩いていくと、すぐ前を娘が三人、月の光に照らされて歩いてた。月の光を浴びて歩くその娘たちを追いかけたよね。それとも、追いかけたのは買い物袋をさげた女だったかな。それもちがって、横っ腹に聖者の石像の影を映してる、家並みと同じほども高さのあるバスがのんびりタイヤの間から煙を吐いて走るのを追いかけてたりして。そして街角を曲がると欄干のあたりに

砕けたガラスが飛び散って、額の汗をぬぐっただろう。そこにじっと立ったまま、靴が砕け散ったガラスを踏んで、もの憂い音をたてるのを聞きながら、コートから包みを取り出して油紙をはがし、高い街灯の光を避けるように背を向けて、熱いホワイトフィッシュに食らいついたんだよね。

食べるのも手づかみだったよね、きっと。そして、唇をなめたりしないよう気をつけながら街灯の光のなかに戻ると、石造りの大聖堂の高く聳える時計台から打ち出す鐘の音が、空気の波となつて頬に感じられて。コートのポケットに忍ばせたボトルの酒をあおったら、新聞が、独り部屋の広告欄のところで折つてあるやつが、ポケットから落ちた。でもかまわないよね。週いくらの家賃や、通りの名前の情報なんかもう必要ないんだもの。ぶらぶら歩きながら部屋の窓を覗きこんでは、小さな看板を捜してたんだしね。手書きの文字を、しかも夜中に読むつてのはまったく骨がおれるよね。それで、その指で本当にベルを押したのかな。

俺だったらヴァイオレット小路はすすめないな、ヴァイオレット小路の部屋ときた日にゃどんなのに当たるかわかったもんじゃないもの。でもあんな、ドリアリー・ステーションあたりに、俺んとこぐらいのいい部屋がもう見つかっただろう。こっちがちゃんとした紳士だったら、湯沸かしをおかみさんの手から取りあげるくらいならの話だけだね。それじゃ、あと二週間もありゃじゅうぶんだね。二週間もすりゃ自分のコンロを据えつけて、湯たんぼの湯を沸かし、留め金のあたりがちよっと漏れる湯たんぼでベッドの足もとをあっためてるだろうよ。それとも、テーブルの脚の折れたところは壁側にくっつけて隠す、部屋着のまま洗面所に行く、出た釘の一本や二本は深靴の

踵^{かかと}で打ちこんでしまうつて調子かな。どっちみち二週間もたつてりや追い立てはくわないよ。そのあたりの部屋は全部——二十八号室、灰^{アッシュ}の水曜日^{ウエズデー}に焼夷弾で焼けた部屋、妖精と白鳥と木の葉の絵柄の鉄製シャッター付きの究極の小部屋——そんな部屋も全部空いてて、そこに住んでから肥りだし、鶏の胸肉に塩味をつけるとか、卵にシェリー酒で風味を出すとか、そんなことを『ポスト』紙の婦人欄に投書したりしてたんだ。間借り人てのは冷たいすきま風とか、窓の縁に積もった雪、夜中の両膝の感触、一晚中頭をかかえてた部屋で食べたマトンチョップの味とかいうやつは忘れないもんだ。

俺の料理はかあさん仕込みなんだ。

かあさんはしょっちゅう往来におっぱり出されてた。俺たちの鍋、食器類、下着なんかはボール紙の箱いくつかに入れて、空いてるところを捜して運ぶんだけど、そのうち縛った紐がすり切れて、かあさんのガーターや葉なんか穴からこぼれちまうんだ。そんな箱が春雨に濡れ、雪をかぶってた。道ばたで水を吸って形もわからなくなっていく箱のそばを、兵隊さん、タクシーの運転手、おまわりさんたちが通りすぎていった。いちど、とうとう乾ききって、埃^{ほこり}だらけの廊下に積みあげられた箱が燃えたことがあった。釘が出てて深靴の踵^{かかと}にひっかかったりする途中の段をとばし、狭い階段を昇ったり降りたりして、小さな家に運びこんだんだけど、そこは死んだ犬や猫^{にゃお}の臭^{におい}があたり一面に漂ってた。おふくろは脂じみたコルセットから金を取り出して、家賃を払ってた。そのあいだに俺はお茶をいれようと、勝手のわからない洗面所まで、黒いポットに水を汲みに行ってた。「さあわが家だよ、かあさん」と、俺は言うんだ。

すると、まずスカートを下ろし、シュミーズを下ろすと、小さな深靴を脱ぐ。それから、下着のゆるい結び目に手をやって言う、「さあウィリアム、その衝立つきたてでうまいとこ隠しとくれ。」衝立はいつも箱のうしろに置いてあって、劇場の楽屋とか相部屋の病室なんかにあるようなやつだけど、ただこいつはばす織り（馬の尾の毛を織りこんだ綿布）みたいな茶色で、かあさんが煙草であけた穴だらけなんだ。朝だろうと真っ昼間だろうと夕暮れどきだろうとおかまいなし、部屋が変わるたびに、まず俺が衝立を立てると、その陰でかあさんは身につけた最後の一枚（哀れな婆さん連中が肌身にまとう、衣装とも呼べないような淫みだらな代物）まで脱いでしまう。そいつをほうり投げると、黄褐色の化粧着に身を包んで、シングルベッドに横たわるんだ。そのあいだに俺は青白い、ゴムくさい炎を出すコンロで湯を沸かしてた。お茶がはいるまでのそんなとき、ドアの向こうで足音が、そして安っぽいプレスレットがガラス窓にかすかに当たる音が聞こえ、冷たい指で看板をしまう音が聞こえるんだ。

俺たちは借り部屋住まいも一緒、宿無し暮らしも一緒だった。ドリアリー・ステーション付近を十五年もうろついて、バスタブに残された足跡やトイレの鎖にぶら下がってるネクタイを見つけたり、ひげ剃り用の鏡を見ると血痕が付いてたりするという毎日だった。かあさんと一緒だった十五年のあいだ、ハイランド・グリーン地区やピンキー通りロードの屋根裏部屋をあちこち——ヴァイオレット小路レインにも二度ばかり——移り住んだけど、ドリアリー・ステーションの駅舎のてっぺんから空に舞い上がりそうな、馬みたいにでっかい金ぴかの天使たちの銅像のまわりはいつもうろついてたな。あるていど母親と一緒に暮らしていると、料理ができるようになるもんだ。自分の体がキャベツの

葉っぱの感触を覚え、かあさんの食べるものはなんでも素手でつかめるようになる。毎晩、夕刊をつかつて、自分の食べ残しの小さくてきれいな軟骨、生のあぶら肉、冷たくて汚れた野菜の皮、それにかあさんの皿の上のまだ温かいひとくち分の残り物なんかを包んでかたづけける。そして毎晩、エプロンのはしにちよっと付いた血を拭きとって、できるだけそっと、新聞紙に包んだやつを持って廊下を抜け、冷たい雪のなかに出ていって、その四角にたたんだ柔らかな包みを、おかみさんの大きな残飯用の缶のふたのすぐ下に押しこむ。かあさんがひとのハンカチで口を拭くと、こっちは残った腎臓のかたまりを煤けて凍りついた窓の縁におく。コンロに花柄の布切れをかぶせると、皮むきナイフ、スプーン、パンのはしなんかをならんだ本のうしろに置く。ポットを置く場所は引き出しのなかの下着の横だな。

ピンキー通り裏の路地に、黒いストッキングを穿いて、肩のところが破れたシャツを着て、赤い房飾りの付いたフランス式のセーラーハットをかぶった男の子がいたなあ。いつも両足に鞭の痕が生なましくて、いっぽうの頬は青く痣になつててね。朝になると、空飛ぶ雁がピンキー通り裏のその路地に暗い影を落とし、黒くタールを塗った建物が灰色の雁の糞で光ってた。親方や新米たちが小さな店がならぶ橋のほうに出かけたあとは、あたりは誰もいない造船所のようにガランとして湿っぽく、死んだようだった。そんなとき、水桶の陰にその少年と犬がいたんだ。

毎朝、ドリアリー・ステーションから蒸気機関車が汽笛を響かせて出てゆくころ、少年は桶から水漏れでできた水溜まりのある石敷きの上に膝をついて、小犬の顎を抱えこみ、毛を撫でたり耳を指ではさんでこすったりしてたな。タールを塗ったドアから水が垂れ、漏れたガソリンや馬を洗